

Title	ポオル・ベルナルの佛印工業化論
Author(s)	松岡, 孝兒
Citation	經濟論叢 (1941), 53(3): 353-361
Issue Date	1941-09
URL	<a href="http://dx.doi.org/10.14989/131587">http://dx.doi.org/10.14989/131587</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

會學濟經學大國帝都京

# 叢論濟經

號三第 卷三十五第

月九年六十和昭

## 論叢

現代世界學としての日本學の根本理念……

經濟學博士 石川興二

支那の田賦整理……

經濟學博士 八木芳之助

企業原理と企業規模……

經濟學士 大塚一朗

資金調整の課題……

經濟學士 中谷實

ロバートソンの四つの係數の理論……

經濟學士 青山秀夫

## 研究

經濟社會學の基本概念……

經濟學士 北野熊喜男

古代猶太共同體の成立……

經濟學士 澤崎堅造

## 說苑

ボオル・ベルナルの佛印工業化論……

經濟學博士 松岡孝兒

## 附錄

彙報

外國雜誌論題

## 説苑

### ポオル・ベルナルの佛印

### 工業化論

松岡孝兒

#### 一

一般的に謂つて植民地工業化論は、植民地の工業化それ自體が問題となるよりも、寧ろ植民地が原始産業段階特に主として農業段階から工業段階に發展することによつて植民地自身が資本主義過程を通過することが、謂はゆる「植民地の自由な發展」「よき植民地制度」を示し更には「植民地進化説」をも生むに於いて一の意義を有つかどうかといふに存する。

このことは今日歐米諸國に於いてよりも東洋特に極東に於いて最も關心を高めしめるものである。蓋し今

ポオル・ベルナルの佛印工業化論

日此の地區に於いては少數の先進資本主義國の金融資本が此の地區の大部分を占める植民地半植民地乃至屬領を支配して居るが、最近世界大戰後ここの最も重要な問題は一言にして云へば實にこの植民地工業化論だからである。

ここで述べるポオル・ベルナルの佛印工業化論もまたこの類型にあてはまる一の見解である。彼が「印度支那工業發展によつて提起された諸問題」中にのべてゐる見解は、如何にフランス帝國會議がフランスの資本主義經濟を防護し繼續させるために「植民地の自由な發展」なるものを考察し實現せんとしたかを如實に示すものであつて、印度支那銀行なるフランス金融資本の支配する此の國の謂はゆる「よき植民地制度」の建設の希望を語るものである。

本論に入るに先立つてポオル・ベルナルが如何にして彼の報告を發表したかについて一言する。

世界大戰後の不況特に一九二九年來の恐慌は逐次世界各國に浸潤波及し、遂に大戰後の好景氣に永く恵ま

1) Union Coloniale Française; Les problèmes posés par le développement industriel de l'Indochine, Paris 1938.

れてゐたフランスをも遅延ながらその渦中に捲きこんでしまつた。そこでフランスは一九三四年十二月三日

から翌一九三五年四月十四日に至る五ヶ月に亘つてフランス帝國經濟會議を召集して之が重要對策を審議し決定した。このことは佛印にも勿論適用されたが、そ

こでは本國及植民地の工業間に利益の對立を示すに至つたので、フランス植民協會之に鑑るところあり、下

記の委員を以つて印度支那委員會を設置し「佛印工業化發展によつて提起された問題」を研究することとなつたが、一九三八年三月十日左の宣言を發表することとなつた。

それによれば本問題は、法律經濟及び政治の三方面から考察されて居り、次の三原則を明かにしてゐる。

一、本委員會は印度支那工業の發展を阻害せんとするがごとき法律規定には反對するものなること。

二、本委員會はまたかかる發展が新方策によつて保護され意識的に便宜を供與されるがごときことに反對するものなること、その理由は佛印の輸出する商品及

原料消費國の側から云へば、それは佛印の輸出を阻害するが如き反動を生ぜしめる虞があるからである。

三、本委員會は交易自由の原則を害する凡ゆる程度の制約に反對するものである。従つて本委員會は夫々獨特の活動範圍の分配を目的とする協定を承認し、協定の結果に對しては本國植民地間の工業に競合ある場合と雖も之に異論を申立てないこと。

ポオル・ベルナアルの佛印工業化論は、この宣言に先立ち既に一九三七年十一月に示されたものであるが同宣言を發表せるフランス植民協會印度支那委員會報告の主報告である。

## 二

佛印工業化に關する謂はゆる「ベルナアル報告」なるものは、法律經濟及び政治の三部面より考察されてゐるが、その重點は斷るまでもなく經濟的見地に在る。そしてまたその經濟的見地は第一に過剩人口問題を、第二に市場販路問題を、第三に本國植民地間の競争を、第四に工業と工人組合との問題を、そして最後に第五

に工業化と社會的進歩の問題を取扱つてゐる。その中に特に重要な事實は第一、第二、第四、第五の諸問題に於いて、また重要な理論は第三の問題に於いて述べられてゐる。彼は佛印の漸進的工業化はこの植民地經濟發展の必然的なものと見てゐるが、その理由を左の二點に歸してゐる。<sup>2)</sup>

第一點には佛印の農業發展はそれ自體では佛印の人口過剩問題を解決することができなく、この人口問題はこの國にとつて近き將來に重要な問題を提起するといふことをあげてゐる。

第二點には佛印の生産する農産品なり工業原料なりの輸出が多數諸國の自給自足の傾向とフランス本國の輸入制限とによつてその困難が増大しつゝあることであるといふ。

ベルナアルはこの二つの理由によつて佛印工業化の必然性を主張してゐるが、更に上述の五個の問題については如何なる事實なり理論なりを盛つてゐるか。これらの點について項を分つて紹介する。

第一問題<sup>3)</sup>は人口過剩を内容とするものであるが、このことは當然食糧問題と結合する。一九三六年の人口調査によれば、東京及安南の全人口は一四、三五六、〇〇〇人であつて、デルタ地區の人口密度は一平方キロ約五〇〇人である。年平均増加率を一、二%とすれば一年に一八二、〇〇〇人、十年に一、八一九、〇〇〇人の増加があるわけで、十年後の總人口は一六、一七五、〇〇〇人に達する。今一人當り年二五〇斤の米を要するとせば、東京及安南に於いては年四五、〇〇〇噸の米の補給を要することとなる。しかもこれは増加人口が一噸の米を得るだけで何等生活の向上改善を考慮しない程度に於いてである。かくの如きは最も緊急な解決を要する問題であるが、併し實際は耕作地は耕作しつくされて收穫増加は一に治水灌漑に期待されてゐる状態である。これによる食糧増加は人口増加に追ひつき得ない。

また人口過剩については佛印的失業即ち仕事の不足といふ現象が現はれてゐる。例へば二期作一ヘクタア

2) Khérian も亦その必然性を説いてゐる。Cf. Les Querelles de l'Industrialisation de l'Indochine, pp. 8-24.  
3) Union Coloniale Française : Les problèmes posés par le développement industriel de l'Indochine, pp. 5-14.

ル當り實際勞働力は二〇〇日分以上を必要としないと謂はれてゐるのに對して東京デルタに於いては八四〇日分と計算されてゐる。即ち同地方平均人口密度は上記の如く一ヘクタアル當り五〇〇人であるが、その平均は一家族五人が一ヘクタアルを耕すとして五人家族中婦人子供を考慮して平均勞働力を五六%とすれば、一家族の實際勞働日分は二・八一年三〇〇日の勞働として $2.8 \times 300 = 840$ 即ち八四〇日分となる。このことは東京デルタが必要勞働力の四倍の人口を收容してゐることを示し、一人の勞働者があれば三人の失業者がある、即ち仕事不足があることを語るものである。此の意味に於いてこの地區では人間のエネルギーが全く浪費されてゐる。この點についてはグウルウも「ナムデ<sup>4)</sup>ン及タイピン地方では一つの鋤に三人の人間がくつききそれを一人の人間が引張つてゐるのをよく見かける。」とかいてゐるが、人間が全く牛馬の代りになる。併し佛印は佛印全體から見ると米が不足してゐるわけではない。それどころか平均二百萬噸は海外に輸出

さへされてゐる。だから遊休勞働力を利用し之に購買力を與へることができればそれで佛印内の過剰米を買ふこともできやうといふものである。この間に於いて種々の生業が考へられるが、そのうち工業こそは最も廣大な市場を提供すると共に購買力を與へるものである。<sup>\*</sup>

西歐近世の歴史を見ても、工業の發展が専ら過剰人口を收容し得たことは極めて瞭かであつて、機械の人間代用は必ずしも失業を將來するものではない。工業化は間接に勞働力の需要を生ぜしめるものであることは北米合衆國及日本の例に見て疑問の餘地はない。

特に彼は日本の場合は注目に値するものであるとしこの日本の最近の經濟的發展と佛印のそれとを比較するものゝないことを奇異なりと論じてゐる。一八七〇年に於ける日本人口は三千四百萬そのすべては農業に従事し米遣ひの經濟が行はれてゐたこと正に佛印と同じである。然るに日本の眞に異常な發展を惹起したものは工業の發展であるがこれも先驗的に考へられたも

4) Gourrou Pierre: Les paysans du delta tonkinois.

\* Marette, A.: Le problème de l'industrialisation des territoires français d'outre-mer, 1934, p. 97. et S.

のではない。事實日本には羊毛、棉花、鐵石、炭等殆んど凡ゆる種類の工業原料が缺乏してゐる。然るに六十年にして主要生産國の上位を占め先進工業國と其の市場に於いて競争するに至つてゐる、

しかもかかる發展の唯一の因素は巧緻にして低廉な勞働力を供給する豊富な人口の存在である。佛印には同じ點が認められるし、安南人が日本人の能力に劣つてゐるといふことも證明されてゐるわけでないから、之が指導國はその發展に必要な資本と指導者とを供與すべきである。以上が第一問題の要領である。

第二の問題は市場販路の問題であるが、ベルナアルは農業生産が發展するに伴つてその販路を海外に求めることの困難があるといふ。殊に世界恐慌後各國は自給自足を意圖して經濟を指導してゐるので、果してゴム、米、砂糖、珈琲より玉蜀黍等に至る種類の農産物を栽培していかどうかは一の疑問であると述べ、佛印の米及玉蜀黍市場、東京の無煙炭市場、佛印のゴム市場を吟味した後更に佛印國內市場發展の必然性を次

のやうに論じてゐる。

それに依れば植民地が其の土民の貧弱な生活水準を向上させるために其の生産を發展させることは一の必然であるとし、フランスが佛印の餘剰生産物を受けつけず、また外國がフランス本國に代つて之を受けつけてくれる好意がなければ、佛印が其の餘剰生産物の大部分を消化し得るやうにする以外には解決の途はないと謂つてゐる。そしてかゝる結果は從來無視されてゐた諸生産力就中工業力を發展させることによつてのみ求められると考へてゐる。但し其の程度も佛印が他の自給自足國に對立して其の生産する商品の大部分を消費ししかも一定の獨立性を有つブロックを構成するといふ程度に於いて考へられてゐる。彼はかゝる考方が帝國會議のそれとは異なることを認め、その理由として同會議が植民地の本國に賣ることを認めずに本國から買ふことばかりを認めてゐることは不合理であるからであると述べてゐる。

この工業化の見解は多くのフランス人の了解してゐ

ることゝは異なる。それは一般には佛印を以つて本國用の香料果實バザア向商品を買ふところであると共に本國工業品の豊富な市場であると考へてゐるから。

實際これは矛盾してゐる。佛印は自ら消費すべき農産物の一部を海外に輸出してゐるが、それは機械、綿製品のような佛印で供給することのできないものを買ふためである。従つて若し佛印にして日用消費品を生産する工業を有つことができるならば、勿論外部に輸出してゐたものは中止され、佛印内でその農産物市場を發見することになる。結局このことは佛印に於ける生産及交易に關する問題に關係して來るが佛印は一般に資源は豊富であり勞働力もまた低廉である。フランスの資本と技術と指導とがその宜しきを得れば佛印の發展は期して待つべきである。この點に關して佛印の工業不進歩は大いに日本の工業進歩に比較さるべきものとされてゐるが、併し此の場合に於いても佛印の工業は決してフランス本國の販路の發展を阻まんとしてゐるものでない。このことをベルナアルはその最低計

畫で佛印二千三百萬の土人に適量の食事と相當な住居と年に二著分の綿服を與へることを目標としてゐると述べてゐる。

以上は第二問題の要領であるが、この點が第三問題たる本國と植民地との競争といふことに關係して來る。この第三點はまた最もよくフランス資本主義植民政策の理論を裏付けてゐる。

第三の本國植民地間の競争なる問題についてフランスで一般に認められてゐる見解は、植民地工業は本國の産業と競争する虞のないやうに指導さるべきであるといふことである。この意味では佛印が石炭、燐、鑽石のやうな採掘産業を盛んにすることや米作、釀造業は勿論輸出産業と雖も本國市場以外の販路を求める限りに於いてはその運営が認められてゐる。またその限り本國が佛印の必要とする加工品を供給する以上セメント、硝子、麥酒、紡績、織布等の工業は、たとひ東京、デルタの稠密地區に於いて多數人口を收容し間接には商業取引の發展を惹起すものではあるにしても之は斷念し



なければならぬ。併し佛印經濟の振興と雖も結局は本國自身の利益を齎すものであることは注目を要する。勿論一時的には佛印の新産業は本國産業に影響するかもしれないが、かゝる産業による富の生産が起り従來の失業者中に新購買層が出現するとき、本國産業は當然之を利用することになるからである。佛印が工業化すれば不可避免的に從來成立してゐた取引關係のあるものは破壊され、これに代つて新しい商品交易量が増加することになる。恐らく此の結果は消費總量に於いて本國よりの輸入率が減少することになるであらうが、併し半面輸入絶對價額は不斷に増加することになるであらう。要するに問題は佛印生産の發展に對する疑惑を棄て寧ろ論理的にはフランスの利益のために相互の結合をはかることが必要である。

ベルナルは此の場合にも日本のダンピングの例を引き、日本の追及した原料買入リンクした製品賣の相互關係より生ずる取引流通は益々増大したと論じ、結局一國の經濟發展は、個人利益の一時的打撃を無視す

れば、特に政治的又は地理的に見て貿易を必要とする國を通じて考察さるべきであつて、佛印の如く香料とインチキ輸入品との交易であつてはならないと説いてゐる。

併し彼によればかゝる場合でもフランス帝國內部の取引自由の原則と牴觸してはいけないのである。此の意味である種の生産特に土民工人組合の如きは支持さるべきではあるが、同時に植民地政府はフランス人たる生産者に對しては本國生産で認められてゐるやうな特種利益を認めなければならぬと説いてゐる。これは自由はたとひ無政府狀態を否定するものであるとしても、正にフランス帝國に於ける生産組織原理を明かにしてゐるものである。それで此の點についてのベルナルの見解を追及することにする。

彼によれば其の原則は左の四點に歸著してゐる。第一點はフランス帝國內の交易の自由は理想的な結論であつて、實際には實際近い將來に於ける問題を準備することが必要であるといふ。第二點では現在の取引關

係を急激に破壊することは不可能であると論じ、第三點では、あらゆる協調は經濟の全部門の相互依存關係を考慮し最廣義の意味の消費者利益を無視してはいけないとし、最後に第四點では生産者間の協調制度は生産者利益の共同計算から来る一層高次な組合形式へ進む第一歩に過ぎないと主張してゐる。その理由としてはこれによつて本國生産者は海外に於ける新産業の發展に對して、その全責任に於いて積極性を示すからである<sup>7)</sup>と結論してゐる。

之を要するに、かゝるペルナルの思想はフランス帝國會議で認められた思想とは對立を示してゐることを再言せざるを得ない。蓋し同會議の要求してゐる點は帝國工業最高委員會を設置し、本國及植民地關係をば競合的でなく補完的なものとして指導せんとするものだからである。ペルナルはかゝる補完的な見解は多くの場合空想的であるといふ。其の理由として本國利益と直接にもまた間接にも競合しないやうな植民地生産といふやうなものは殆んど考へられないと斷言

てゐる。佛印の場合について云へば米や玉蜀黍は麥を排撃するのである。この故に寧ろ到る處に存するものは競合であつて利益の合同とか併存とかといはれるものは存在しない。加之行動の制限や勢力圏の設定は公然競合を排除するものであつて、かゝる處に技術の進歩は認められない。フランス帝國の資本家的生産者は外國勢力に對しては關稅が保護してくれるし、國內の負擔は公平に分擔するしするので、生産設備がともかく消費者需要を滿す限りでは費用を投じ冒險的に改良を行はんとするが如きことはしなくなる。こゝに帝國第一主義政策に對する最大の難點がある。かくの如き點に於いて補完的生産は批判され競合的生産のみが残されてくる。

第四の問題は工業と工人組合との對立問題である。彼は佛印土民に購買力を與へるにも工人組合は必要であつて、必ずしも賃勞働者による工業の發展のみが期待さるべきものでないことを論じた後、土民の幸福即ち必需品の供給及び購買力の増加の問題から見て西歐

7) Union Coloniale Française: op. cit. pp. 38-40.

的工業のみが齎し得る効果と同じものを工人組合の發展に期待することは危険な幻想に捉はれてゐると斷じてゐる。

かくて最後に第五には工業化と社會の進歩なる問題を取扱ひ、佛印土人は大體半農半工的勞働者であるから之を考慮した施策が必要であるとし、これがためには西歐的工業を中心として尙之に配するに工人組合を以つてすべしとし、此等の總體が眞の家族的經營の貌を示すが如く指導さるべきものであるとし、日本の東京、大阪、名古屋の家内工業を比較の對象としてゐる。これらの見地からベルナアルは佛印工業化は必ずしも個人と其の傳統的環境とを離してしまふものではないと結論してゐる。

### 三

ベルナアル報告なるものゝ經濟的内容は以上の如くであるが、これは勿論印度支那委員會の他の委員の批判を受けてゐるしベルナアルも亦反批判してゐる。此等の内容には今は觸れない。

要するにベルナアルの佛印工業化論は、佛印は今やその經濟力の一部は工業化すべき段階に適してゐること、佛印の農業進歩もそれだけではその人口特に東京地方の人口増加に應じ得ない状態にあること、これがためには農産品の輸出も必要だが適當な工業化が考慮されなければならないこと、此の場合多くの工業は佛印の傳統的環境から離脱した賃勞働者を生ぜしめないやうに組織さるべきこと、これがためには勞働者がその時間の一部を農業にも使用し得るやうに資本家と土民工人組合とが協力すべきこと、此等のことを内容として展開されてゐる。

これらのことは確かに「よき植民地制度」の一つであらう。併し果して工業化が佛印二千三百萬の人々とつての萬能藥であらうか。この問題に關してはハノイ大學ケリアン教授も同様の言葉を彼の意見として述べてゐる。<sup>9)</sup>

8) Union Coloniale Française: op. cit. pp. 40-50.

9) Khérian, G.: op. cit. p. 41.